

福祉のひろば

10

2012

特集

認知症グループホーム

トピックス

座談会 認知症ケアにせまる―京都・七野会グループホーム―
グループホーム（認知症対応型共同生活介護）の制度変遷

入浴事業は高齢者の心を温め、「廃止」は、水風呂、攻め

「身上監護」が困難な成年後見制度の課題（前篇）

現代に生きる真田理論―真田是著作集発刊記念講演会

ひろばトーク「ハートプラザKYOTO」店舗責任者 上野 聡子さん

社会と障害のある人のかげはしに



住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒 604-8083
京都市中京区三条柳馬場東入中之町10
代表取締役社長 川下 晃正
TEL (075) 211-7277
FAX (075) 211-7270
<http://www.kyoto-archi.co.jp/>

〒601-8382
京都市南区吉祥院石原上川原町21
<http://www.creates-k.co.jp>

クリエイツかもがわ

TEL 075 (661) 5741
FAX 075 (693) 6605
価格税込・送料何冊でも240円

●悲しみを越えて小さな希望の種をまきましよう
重症児者の防災ハンドブック
3・11を生きぬいた重い障がいのある子どもたち
3刷
定価2310円

田中総一郎・菅井裕行・武山裕 ◆編著

●高齢者や障害児者など「災害弱者が優先される社会を！
発達障害児者の
防災ハンドブック
いのちと生活を守る福祉避難所を」
新井英靖・金丸隆太・松坂晃鈴・木栄子 ◆編著 定価1890円
多くの発達障害児者と家族の生の声、避難状況、実態調査
からの教訓と福祉避難所のあり方、運営システムを提言。



●特別な人が介護を要するのではなく、
誰もが介護に関わる時代はすぐそこに
地域に根ざした豊富な事例と深い理論
的考察、先駆的な取り組みに学びなが
ら、「介護の質」が保障された地域社会
を展望する。
定価2310円

森山千賀子・安達智則 ◆編著

介護の質

「2050年問題への挑戦」
高齢化率40%時代を豊かに生きるために



地域とともに、家族とともに

— 認知症グループホームの暮らし (京都・七野会)

グループホームがめざすものは普通の暮らし、当たり前暮らし。残存能力を大切にしながら、食事づくりに腕を振ります。人は誰かの役に立っているという存在感が、生きがいへとつながっています。



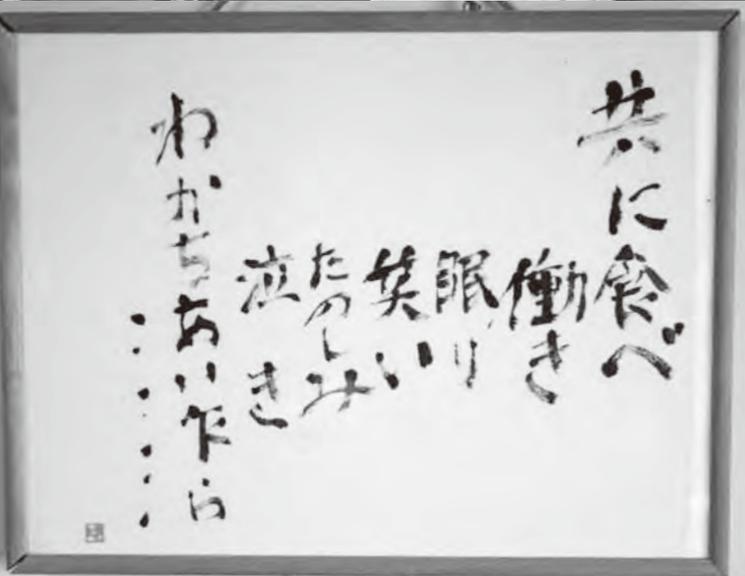
グループホームの特徴は地域の中で暮らすこと。食材料をそろえるために毎日ご近所の商店街にでかけ、買い物をする姿も真剣です。「毎度おおきに」という商店からの声に、地域で暮らしている実感がひしひしと。



商店街主催の七夕夜市。グループホームも毎年出店し、地域の一員としての役割を担います。



グループホームは第二の家庭。ご家族も気軽に、足しげく通われます。家庭的な雰囲気の中で子や孫、ひ孫に囲まれてひとときを過ごすことも楽しみの一つです。



在宅生活では認知症によって混乱、不安、焦燥にかられ、さまざまな生活障がい呈していた利用者も、グループホームで安心・安定した暮らしを築くこととなります。満面の笑みがそのことを如実に語り、笑みに支えられて職員の喜びと誇りへとつながります。利用者職員、それはともに生活を営む新しい家族の形でもあります。(写真と文 廣末利弥)

●特集● 認知症グループホーム

座談会 認知症ケアにせまる

—京都・七野会グループホーム—

廣末利弥・永井瞳・溝口優子・宮本武史・石倉康次 10

グループホーム（認知症対応型共同生活介護）の制度変遷 22

●トピックス●

入浴事業は高齢者の芯を温め、「廃止」は「水風呂」攻め 来住 和行 24

「身上監護」が困難な成年後見制度の課題（前篇） 有田 和生 28

“そもそも” 社会保障・社会福祉はどうあるべきか

—現代に生きる真田理論— 真田是著作集発刊記念講演会 32

総合社会福祉研究所

第25回定期総会議案 理事会補足報告（概要） 38

●連載●

フォーラム

子育てが楽しいといえる社会に

—子育て支援に期待する基盤の広がり 植田 章 46

ひとつのこと—社会福祉労働と私たちの実践

人とつながる、地域とつながる施設をめざして せんごくの里 48

連載 小川政亮 第二部 自伝（7）

かの安保闘争の年、朝日訴訟一審判決！ 小川 政亮 50

相談室の窓から 頑張りすぎないで（1） 青木 道忠 54

わらじ医者 早川一光の「よろず診療所日誌」

不思議、ふしぎ、人間のつくり（その10） 早川 一光 56

よりあって おりあって—宅老所よりあい物語—

「食べる」ことが「生きる」こと—幸子さん その3— 下村恵美子 58

育つ風景 七夕の願い 清水 玲子 60

穂波のアメリカ子育て事情

保育料の補助を受ける裏技 吉田 穂波 62

映画案内 『人生、いろいろ』

吉村 英夫 64

現代の貧困を訪ねて 最近の相談から

生田 武志 66

施設訪問ボランティア

子どもとの一对一の関係を大切に 星の子キッズ 68

私の研究ノート

インクルーシブな教育の探求—子どもたちが安心して学べる

学校づくりをめざして 窪田 知子 70

ホームレスから日本を見れば ありむら潜 72

花咲け！男やもめ 川口モトコ 74

福祉のひろば

2012年10月号

●表紙の絵と写真●

絵＝神門やす子

写真＝大阪市西成区・釜ヶ崎の三角公園では毎年夏の終わりに「たそがれコンサート」が開催されます（下野祇園）

●カット●
川本 浩

みんなのポスト 44 / 今月の本棚 73 /

しりとりであそぼう！ & 憲法クイズ 75 / 福祉の動き 76

●グラビア● 地域とともに、家族とともに

社会と障害のある人の かけはしに

特定非営利活動法人 京都ほっとはあとセンター
「ハートプラザKYOTO」店舗責任者

うえの
上野

さとこ
聡子さん

設立当初、二〇〇三〇の会員数ではじまった「京都ほっとはあとセンター」（以下、センター）は、現在は一六三の施設が会員登録しています。センターの事業は、「ほっとはあと製品」（授産製品）の品種増・品質向上、販売促進（常設店舗の直営を含む）、工賃（賃金）アップ、障害のある人びとの就労支援（就労支援A型の事業所〈喫茶店〉経営を含む）に取り組んでいます。

私は、ほっとはあと製品を販売している「ハートプラザKYOTO」（一九九七年、京都駅ビル九階に開店。以下、ハートプラザ）の店舗責任者をしています。同様の販売店は観光名所の嵐山にもあり、天龍寺門前の「ぶらり嵐山」（二〇〇一年開店）です。

ハートプラザは、行政と京都府内の障害者福祉施設が共同した事業であることも特徴的ですが、授産製品の販売店舗が観光都市京都を代表する一大商業施設である京都駅ビルの中にあることが大きな特徴です。この実績は、一九九〇年を前後して、京都府・市と障害者福祉施設が授産事業の振興をめざして「公・民実行委員会」を組織し、京都駅の協力を得る中で、全国にさががけて取り組まれた「愛のワークサポート推進事業」がその契機になつていると聞いています。駅前広場に巨大テントを設営して大々的な販売事業が展開されたという経緯が背景となつているそうです。もちろん、その当時から、京都の授産製品は全国的にも常に高いレベルだったからこそ、こうした先駆的事业が可能だったのだと思います。

ハートプラザでは、センターの会員になつている施設のほっとはあと製品を販売しています。その役割は、単に仕入れた製品を販売して売上げをあげることにとどまりません。店舗の経営・運営自体が、障害のある人が仕事をするごとと地域で自立した生活を送るための工賃向上（所得保障）を支えるという役割を担っていますし、作り手が自分の



NPO法人京都ほっとはあとセンター

1995年、障害のある人たちの自立とさらなる社会参加を目的に、京都府・京都市及び府内の授産施設や共同作業所等がひとつになって「京都授産振興センター」を設立。2006年、NPO法人格を取得し、これまで授産製品と呼ばれていた製品の愛称を「ほっとはあと」とする。2007年、現在の団体名に改称。

つくった製品が売れ、自分が社会に参画していることを実感できる場でもあります。販売製品について、施設と一緒に改善点を相談することもあります。ひとつの製品の後ろにある作り手の生活や仕事に目を向け、そこを大切にしながら、施設や障害のある人に寄り添って、一緒に販売、運営していけることが特徴だと思います。

私はもともと百貨店の販売員をしていて、福祉や障害の分野とはまったくつながりがありませんでした。そんな私がここに飛び込んできた時の第一印象は、製品の質が高いということでした。それは、お店に来られるお客さんも同じです。一般の方が多数往来する観光地の商業施設の中にあることで、授産製品自体を知らない、製品の製造に携わる障害のある方たちの姿がはつきり思い浮かんでこないようなお客さんの来店が多いのです。授産製品であることを説明すると、みなさん、品質の高さに驚かれます。店舗自体がお客さんの知らない世界を伝える場であり、作り手の技術の高さや力・意欲を伝えられる場にもなっていて、障害のある人の仕事や生活について見方が変わるきっかけになっているのです。お店が、これまで縁のなかった作り手と社会（お客さん）の出会いの場になることは、とても重要な役割だと思っています。

センターの取り組みを他県から視察に来られることもあり、ほっとはあと製品も高く評価されています。また、京都駅という外国人を含む^{あまた}数多の人々が往来・交流するエリア・スペースに所在する店舗で、多くの人と人とのご縁がほっとはあと製品によって結ばれていくのです。こうした人間関係の広がりや、京都府内の製品の質の向上だけでなく、その質を全国に発信していくための力になると確信しています。そして、最終的には、すべての障害のある人々の地域生活の充実・向上につながるソーシヤル・アクションの場になってほしいと願っています。

〈特集〉

認知症グループホーム (認知症対応型共同生活介護)

暮らし続けてきたこの街で、介護が必要になっても暮らし続けていきたい。特別せいたくはない願いや要求ではないはずなのに、高齢になった、認知症になった、障害がある、そのことでこの街に住み続けられない。施設づくりの運動は常に、今までの暮らしと離れた生活施設づくりではなかったし、今までの暮らしの延長線上に、その人と家族、社会福祉関係者が、住み続けられる街をめざして、その中で問題や課題を整理し、克服し、発展し、実践してきました。そこに自治体や社会福祉協議会が加わる時もあります。特別養護老人ホーム等のような一定規模の施設はつくれなくても、グループホームなどと、少人数で暮らしの場に近い場として受け止められ、希望の場として広がりました。しかしその位置づけは、介護施設と居宅の狭間におかれ、経済優先の国の政策の中で、報酬は居宅におかれ、自己負担がかかる仕組み



二〇一〇年一〇月一日現在の事業所数は、認知症対応型共同生活介護は一万四八か所、介護予防認知症対応型共同生活介護は九八一四か所(二〇一〇年介護サービス施設・事業